
Gundam Generation Novel -Gジェネレーション ノベル-

ムラキ ヒロヨシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gundam Generation Novel - Gジエネ
レーション ノベル -

【Zコード】

N2063P

【作者名】

ムラキ ヒロヨシ

【あらすじ】

2×××年、とある奇跡から導き出された技術により、人類の文明レベルは大きく進歩し、宇宙進出を可能にしていた。

しかし、どれだけ技術が進歩しようとも人間は愚かなままで、新たな火種がくすぶり、物語が動き始めていた。

これはオリジナルの世界観で、オリキャラを主人公として、ガンダムシリーズの登場人物達と時には一緒に力を合わせて活躍し、また敵として対峙したりするお話しです。このお話しの中出てくる

ガンダムの登場キャラクター達は、性格や立場が違つたりしますのでご注意ください。

また、ほぼ全てのガンダムを網羅していないと理解不能な点、またネタバレになる点もあるので、了承ください。

序章　一革新の兆しー

人は宇宙のことについてどれだけ知っているのだろうか？
宇宙はなぜ生まれ、存在しているのか……？その問いは遙か昔から議論されているが、未だに答えにはたどり着いていない。

しかし、そんな中で一つ確かなことがある。それは人間が宇宙服なしでは宇宙で生きていけないということ。

人は宇宙から拒絶されている。そう、僕が今の社会から拒絶されているように。そんな取りとめもないことを考えながら、僕はシャトルの中で座つてじつと打ち上げの時を待っていた。

今僕は、宇宙そらに飛び立とうとしていた。

2×××年、宇宙旅行が21世紀初頭の海外旅行並みの料金で行けるようになつた時、母さんがたまたま応募した懸賞で初のフライト搭乗の権利を当てた。

最初はどうしようか迷つたが、旅行会社側も全面的にバックアップしてくれるということで話はまとまり（たぶん、旅行会社側にも誰でも宇宙に行けるという宣伝になるという魂胆もあるのだろう）こうして僕たち家族は、世界初のツアーモード宇宙旅行に行くことになつた。いくつかの訓練を受けたり（僕の場合は特に念入りに）、いろいろと検査を受け、ようやく出発まで漕ぎつけた。

「ほら、そろそろ出発みたいよ！」「

「ひらひら、ちょっとは落ち着きなさいな」

凄く興奮している母さんの隣で父さんがたしなめている。

子供っぽいところのある母さんに、普段は物静かだけど頼りがある父さん。息子である自分から見てもなかなかお似合いなカツプルだと思つ。

それだけに、自分みたいな子供を授かってしまったのは不幸と言つていいだろう。

それでも一人は泣き言や恨みごとひとつ言つたことはないけど……。そんなことを考えていると、出発のアナウンスが響き、窓にシャッターが降りる。

静まり返るシャトル内。そしてカウントダウンが始まり、10から0になり……

ズウ―――ン――

もの凄い音と共に、かなりのGが体に圧し掛かる。これでも昔のロケットの何分の1の負荷らしいが、それでもきついものはきつい。僕は顔からにじみ出る汗を不快に思いながらも歯を食いしばってなんとか耐え抜いた。

そして……

「わあっ、凄い！」

窓のシャッターが開くと、そこからは地球が見えた。青い星、地球。そんな使い古された言葉が僕の心の中に浮かんできた。なんて、なんて綺麗なんだろう……。しかし、その後さらに別の感情で僕の気持はいっぱいになつた。

それは意外なことに、なつかしかった。初めて来たはずなのに、なんだか僕はずつとここ宇宙で生きていたかのようだ。

そんな不思議な感覚が自分だけのものなのかを父さんや母さんに聞こうとした瞬間、事態は急変した。

一一一一一一一一一一一一

けたたましい音をたてて船内に響き渡る警報。そして大慌てで駆けまわる（といつより飛び回る）フライトアテンダントの人達。

一
な、
なんなの！？

まわりがざわめく中、動搖する母さんと、落ち着いた様子で僕と母さんのことに気を配る父さん。

そして次の瞬間……

メキツ！メキメキメキツ！！

急に船体が悲鳴を上げ出し、そして目の前の席が突然消えた。

えつ?

僕は体を硬直させながらも頭の方は直ぐに前の席がどこに行つたのかに気付いた。そう、前の席は、というよりシャトルの前半分が折れてしまつたのだ。それがどんな原因かはわからない。とりあえず、今の現実は、船体が折れたということ、つまりシャトルが壊れ、さらにシートベルトがちぎれ、僕の体は外に放り出されたということだ。

そのよつな思考を走馬灯並みの速さで巡らせながら、最後には死
といつ文字が頭の中に浮かんでどんどん埋めつくしていくつた。

(ああ、もうダメなのか……)

そんなことをかすかに考えながらも、それでもいいかな、と思つてしまつた。

どうせ長く生きてもあんまり有意義な人生を送れそうにないし、宇宙の藻屑に消えるのもそれはそれで豪勢かな……なんて思つては、目の前に父さんと母さんが未だにシートベルトに繋がれて席に縛り付けられている姿が見えた。

人間は生死の境目の時に本性が出ると言われているが、それは本当らしい。なぜなら、父さんと母さんは今までにその命綱であるはずの（まあすでに船体が壊れているから無意味と言えば無意味なのだが）ベルトをはずして、船体から放り出されながらもこちらに手を差し伸べてきたからだ。

その瞬間、自分でも驚くぐらい強く、激しく、救いたいと思った。地球にいる幼馴染の娘にこのことを言つたら「もう、あなたの家族はそろつて！」とあきれられそうだが、僕にとつては自分みたいな子供を育ててくれた優しくて温かい、自分の身よりも大切な両親だ。

僕は必死に手を伸ばそうとした。しかし、そこで思い出す。

そうだ、僕には手がないんだつた……手だけじゃない、足もない。それでも、こんな手も足もない僕でも……

「助けたいんだ！！」

後にその場にいた人は、全員僕の言葉が聞こえたと言つていた。しかし、すでにほぼ真空状態だったあの場で僕の声が聞こえるわけがない。

そう、普通なら。

だけど、僕はあの時手を伸ばすことができた。本物の手ではないけど、両親を救うことのできる手を……

日常と死の終わり

「……そして、その後救助船に収容された人達は全員無事で、ビッグニュースになりました」

教壇の横に浮かび上がっているモニターに映つてゐる当時の救援に同行していた記者が撮つた写真を次々に切り替えながら、灰原朱雀ことスザクは、最後の写真を写し終わると、いつたん言葉を切つて、仕上げにかかった。

「その後、この船に乗つていた両手両足がない少年Aがこの奇跡の元であることが判明。そしてこの事件を期に発足した6名の天才科学者達から構成されたチームGUNDAMにより、その力の利用方法が導き出され、今日の発展に大いに貢献したのでした。以上で終わりますが、何か質問はありますか？」

こんな授業でいちいち質問する奴なんていないだろ？……いや、一人、あいつを除いて……なんてスザクが思つていると、案の定あいつこと鳳火乃香のやつが手を挙げた。

「はい、どうぞ」

スザクが投げやりに言つと、ほのかは立ちあがり表情を全く変えず、淡々と質問をする。

「その発展と言うのは、具体的にどのようなものですか？」
(くつ、やつぱりつこんできたか……といつかこの中途半端な終わり方から間に合わなかつたつて察してくれよ……でも、このまま答えられないと単位が危ない！)

そう考えをまとめたスザクは、アドリブで思いつく限りのことを話すこととした。

「はい。一つには先天的身体障害者と言っていた人々の地位向上でしょう。あの力の発見のおかげで、大多数のかれらは宇宙に行くことにより、宇宙空間に適応した新たな能力が手に入れられることが分かり、さらに知能指数が低いと言われていた人々も、宇宙に行くと重石をどかされたかのように素晴らしい能力を發揮し始めました。彼らは通称宇宙覚醒者と呼ばれ、今日までの宇宙進出に大いに貢献しています。

それと一番大きいのはやはり戦争関係でしょう。昔はやれテロだやれ戦争で戦闘だ空襲だで何万という数の命が失われていました。しかし、今あの力から作られた簡易型バリアフィールド発生装置のおかげで大抵のことでの命を落とすことはなくなりました。それにかのチーム^{モビルスーツ}が作り上げたロボット、GUNDAMや、それを元に作られたMSも忘れてはいけません。あれらの登場のおかげで、宇宙において人類の行動範囲は格段にアップしました。以上でどうでしょうか?」

なんだか話しが前後したりして支離滅裂つぽかつたけど、一応説明はしたぞ、的なオーラを出していると、通じたのかほのかは大人しく座つた。

いつしょによつやくスザクのプレゼンは終わったのだった。

「スザク、今日もゲーセンに行こうぜー。」

授業が終わった後、シンがスザクをいつものメンバーでの寄り道に誘つ。

「わりい、ちょっと用事があるから、また明日誘ってくれ」「そつか……、じゃあ、明日な。絶対逃げるなよ。この前の対戦、まだ決着ついてないんだからな」

と、冗談半分で拳を突き出す。

「お兄ちやん~！」

スザクが拳をこじりんごと突返すと、その時シンを呼ぶ声がした。

「なんだよマコ。わざわざクラスにまで来て？」

シンが「じゃあな~。」と言つて、教室の扉の前に立つてシンを呼ぶ彼の妹のマコのところまで駆け足するのを見送つたスザクは、とうあえず次にほのかを探すことにした。

クラスメイトが部活やら放課後遊びに行くのに集まつてゐるなか、あいつは一人さつさと荷物をまとめて教室を出て行くところだった。スザクも急いで机の上に置いてある鞄を取り、その後を追つた。

スザクが追いかけて来るのを感じたのか、ほのかは立ち止まって後ろを振り返つた。

「何？」

ほのかは追いついたスザクに一言だけそう言つとすぐさま歩き

出した。さうやら歩きながら話せとこいつとじこ。

「いや、あんとき質問してくれてサンキューなつて言いたかつたんだけど……」

そり、最初はわざわざ質問するなんてなんだよと思ったが、よくよく考えてみるとあの質問がなかつたらプレゼンは中途半端に終わつて合格点をもらえたか微妙なところだつた。

「別に、あなたやあなたの両親には良くお世話をなつてゐるし、お礼を言われるほどのことじやない」

完璧な無表情で淡々と呟く火乃香。

「クールだなあ。やつぱコーディネーターつて言つても、いろんな奴がいるよな。シンとその妹のマコちゃんなんかは凄い明るいし、ヤマト先輩みたいに、温かな感じの人もいれば、お前みたいな無表情で何考へてるか全く分かんない奴もいるし」

「それはそう。コーディネーターと言つても、色んな人がいるのはあたりまえ」

「」で無表情の中に赤の他人にはわからないだろうが、少々付き合いで長いスザクにはわずかだかわかる感情が見えたと同時に、自分がまたヘマをやらかしたこと気に付いた。

そう、それは苛立ちだつた。まあでも、それは無理もない話しだ。コーディネーターが認知されてから30年、遺伝子を人為的にいじるということでなかなか議論や差別があつたらしい。

いや、現在進行形である場所にはあるらしいが……（）オープ直轄コロニーへリオポリスでも、時々下世話な3流番組でコーディネーターに対するあけすけな批判が報道されることもある）

しかしそれでも、普通はまつたくといつていいほど皆無だ。そして、当然スザク自身もそんなつもりで言ったわけではない。

「いやあ、『めん』『めん』。別にそんな悪い意味で言つたんじゃないんだけど……」

「謝らなくて」

「謝らなくて大丈夫、あなたの性格はよく知ってるから」
（それは俺が考えなしつてことを言いたいのか……）

「そんなに怒るなよお。……よしり、わかつた！帰りにお前のお氣に入りのショークリーム買ってやるから」

その言葉に、ほのかはびたりと立ち止まつた。

「...」

「いくつ買ってくれるの？」

(や、やっぱりいつも食べるのか……いつもは小食のくせに、甘いもの、特にショーケリームとなると鬼になるからなあ。これは俺の残り少ないじづかいがさらに崖っぷちに追い込まれそうだ……)

なんてことを考えながらも、その代償を払い見れるだらうほのかの笑顔のレア度は値千金とも言えなくもないかな……、と、自分を納得させて、ほのかに急かされつつスザク達は校門に向かつた。

「ほんにちは、セシリーさん」

スザク達は学校から徒歩数分のまだ真新しい街並みの中にある、とあるパン屋に来ていた。

「あ、灰原君、いらっしゃい」

店の中に入ると、セシリーさんがまばゆいスマイルでスザクたちを迎える。

ここはパン屋兼洋菓子屋は一年ほど前にできたもので、セシリーさんとシーブックさんのアニー夫妻一人で経営している。確かに味と、夫婦の接客のよさからなかなか繁盛している。かく言うスザクたちも常連さんで、結構親しくさせて貰っている。そういうわけで、店の裏からシーブックさんも出てきた。

「お、スザクじゃないか。ほのかちゃんも、いらっしゃい。今日はデート？」

スザクは笑いながら、隣に立つほのかは無表情のまま、

「違います」

と、せりりと答えた。

「……息ひつたりじゃないか？お似合いだと想うんだけどなあ。まあ、それはおいおいなんとかなると思つことにするとして、今日はおつかい？」

「いえ、今日はここのショーケースをおい」

「あ、やつぱつトーントなどじゃない」

「だから違います」

「……」

今回答えたのはスザクだけだった。

隣にいたはずのほのかはすでに窓際のいつも席に座つてスザクをじっと見つめ、シュークリームと紅茶を運んでくるのを待つている。

「はいはい、ただいまお持ちしますよ、お姫様。それじゃあセシリ
ーさん、紅茶2つとショーキーラムをとりあえず4つ……いや、8
つください」

セシリーさんから受け取ったトレーを持って席につくと、ほのかは上品に、しかし素早くという離れ業を駆使してショーケースにとりかかる。

スサクは反対の席に座り、そのこの世の誰よりも幸せそうな顔を眺めながら、さつき「冗談でもいいから『データ』だって言っておけばなんか変わったのかな、なんてことを紅茶を飲みながら思つたりしていた。

今の世界情勢は極めて複雑だ。

スザクのプレゼンの中できちんと出てきた少年Aを皮切りに、人の文明は大きく革新した。MSの開発、4本の軌道エレベーターや多数のコロニーの開発など、それまでの技術では不可能だった発展がありえないほどの速さで行われ、文明の進歩を2世紀ほど縮めたと言われている。

それは時代が西暦から新暦である宇宙開拓世紀に変わつてからも続いており、それに伴い今は昔のように国同士が争つてはいるだけと

いうわかりやすい構図は無くなってしまった。

大まかにまとめると、まず地球の多数の国家が所属している地球統一連合（内部には多数の派閥があるらしい）と、それに属さない小さな国家連合などが地球に存在し、宇宙には地球から移民してきたコロニーに住む人々、宇宙に適応するために遺伝子操作されたコーディネーターが多く住むプラント、月のムーンレイスやその他ジヤンク屋同盟などの様々な組織が存在し、小競り合いや小規模な紛争、戦争などをしている。

また、宇宙覚醒者のみで構成された組織も存在するらしいが、それは一般人が知れるレベルのことではない。

そんな中、オープは地球上に国家を置く中立国（一時期連合とプラントの抗争に巻き込まれかけ、危うかつたこともあるけど、何とか乗り切ってる。ちなみにその時に今スザクが親の仕事の都合で住んでる）（ヘルオポリスも半壊している）なので、戦火やそう言った（いざこざとは今のところほとんど無縁。

このままいけば自分には平穏、いや、平凡な人生が待っているだろ？。

そんなわけで、今のところスザクは目の前にいるこの幼馴染と呼ぶにはまだそこまで古い付き合いではなく、かといって他人とかお隣さんやクラスメイトで片付けられるほど短く薄い付き合いではないほのかとのことを気にしていられるのだった。

そう、最近スザクはほのかとの距離を測りかねていた。いや、正直に言うと、この無愛想で無表情な女にスザクは結構惚れていた。

まあ最初会った時は、なんだこの能面女は？と失礼なこと思ったが、あることをきっかけによく一緒にいるようになり、次第に彼女の魅力が見えてきたりして、気付いた時には手遅れだったわけだ。

しかし当のほのかは無表情のポーカーフェイスで、彼女が自分の

ことをどう思つてゐるのか皆田見当がつかない今、スザクはとりあえず一緒にいられる現状で満足することにしていた。

そんなことを考えながら、ほんの無言なティータイムを一時過ぐし（た後、スザクたちは帰ろうとした（もちろん家で食べる用のショーキャラムも買わされた）が、その時けたましいサイレンが「ローラー中に響き渡りせるかの」とく鳴った。

そして、スザクの平穏な日常とその後に続くはずだった未来は、この時を境に瓦解し一変した。

日常とかの終わり（後書き）

更新は不定期ですが、気に入っていたらまた読んでください。

不死鳥との出会い

「これは！？」

シーブックさんが急いでカウンターの裏から飛び出して外に出た。その後に遅れてスザクとほのかも続く。そして外で最初に見たものは、遠くの方で燃え盛る炎とその上で踊るように空を舞う数機の機影だった。

「あれは、ザフトのジンと統一連邦のダガー、それにジオンのザク……全て旧型？迎撃には防衛部隊のシビリアンアストレイが出てる……」

火乃香は手に持った携帯型デバイスのモニターを開いて戦闘を繰り広げている機体の情報を読みあげた。

「連邦にザフト、それにジオンだつて！？ここのはいつからそんな色んなところから攻められるようになつたんだよ！」

スザクはわけがわからず混乱してしまった。この国では戦争はないとさつきまで思っていたのに、これじゃ飛び火どころか戦火の真つただ中じゃないか！

バチインッ！

呆然と突つ立っていたスザクの頬をほのかが思いつきり叩いた。

「おちついで……」

最初は反射的に喰つてかかるうとしたスザクだったが、それぐらいしないと立ち直れないくらい動搖していたことに気付き、すぐに氣を静めた。

「帰ろ」

スザクは小さく呟き、ほのかの小さな手を握り駆けだした。

その時に後ろを振り返つていれば、店の前にいたはずのアニー夫妻の姿が見えないことに疑問を持ったかもしれないが、その時はスザクにそんな余裕は欠片も無かつた。

スザクたちは家に一旦帰ろうとしたが、途中で近くのショルターに避難せざるおえなくなつた。

すでに守備側のアストレイが港口から撤退を余儀なくされ、市街地ぎりぎりまで防衛ラインが下がつてしまつていたからだ。

ものすごい熱風を伴いながら撃ちだされるダガーのビームライフル。いくら簡易型バリアフィールドを持っているからといつても、何回も直撃を喰らえばどうなるかわからない。

なので、スザクたちはとりあえず近場のショルターに退避することにしたが、走つていると運悪くいきなり大型トレーラーが角を曲がってきた。

しかもジンに追走されている！

そんな時にお会いがしらにスザク達がいて、反応が遅れたのかトラックは上手く避けられずバランスを崩し、もの凄い音を立てて横転してしまつた。そして放り出された荷物からカバーがはずれ、中

身が曝される。

「なんだ、これ……？」

それは、巨大な戦闘機だつた。それもスザクが今まで見たことのないタイプの。

戦闘機にしては大きすぎるし、良く見る宇宙用の戦闘機には普通無い羽が付いている。もしかするとモビルアーマーと言う奴かもしれない。色は白と赤を基調にしていてかなり目立つそうだ。

そんなのんびりした分析も、ほのかに手を引っ張られて機体に向かつた瞬間に吹っ飛んだ。

「おいつー、いつたい何しよ、うつてんだよー！？」

スザクは何となくわかりながらも一応聞いてみた。

「あの機体でここを離脱する」

「んな無茶な！？」

スザクが直ぐに手を引っ張り返そうとしたが、ほのかが指差した方向を見て愕然とした。トラックが横転していてショルターの入口が潰されていた。

「わかったー！でも、お前操縦なんて出来んのか？」

「できる……だぶん」

「たぶんかいっ！？」

しかしツッコンだ彼に出来るかと言えば、答えはアリだ。

もちろんスザクも学校で小型宇宙船や作業用モビルスーツ、ジムの操作訓練を受けているし、ゲーセンでも良くリアルな戦争ゲーム

で遊んでいたが、こんな状況でいきなりは無理だ。

(とつあえず、ここは一か八か火乃香のやつに任せるとしかない。)

トライックの護衛だつたらしいシビリアンアストレイがジンを防いでくれているおかげで何とか二人は無事に機体までたどり着き、早く乗り込んだ。上手い具合に2人乗りだったので席の心配はない。

ほのかが前、スザクが後ろに乗ると、ハッチが自動的に閉まった。起動前で真っ暗な端末に次々と光が灯り、文字が浮かび上がってくる。そしてそして最後に、「PHOENIX GUNDAM ZERO - 2nd」という文字が現れた。

「フュニックスガンダム?」

スザクがそれを読みあげると同時に、

「出る」

と、短くほのかが言つたと思つと、急に真っ暗だったウインドウが外の様子を映し出し、そして上昇し始めた。

その時ちょうど援軍に駆けつけてきたらしい新たなジンが、アストレイを挟み撃ちにして撃破したところだった。

2体のジンのモノアイがこちらを向き、脚部に装備されているポッドからミサイルが一斉に撃ち出された。

「げつ……」

(避けられるのか?)

スザクは思考が停止して動けなかつたが、ほのかはモニターから目を離さなかつた。

「舌噛まないでね」

スザクが返事をする暇もなく、ほのかはスロットルを全開まで入れる。もの凄いGと共に、ジン達からどんどん遠ざかっていく。

スザクは目の前に映るモニターの映像でミサイルがあさつての方に向で爆発するのを見ながら、意識を失つていつた。

「冷てつ……」

スザクの起きてからの第一声はそれだつた。起きて辺りを見回してみると、そこはスザク達の学校の体育館だつた。すぐ近くにはさつきの機体が置かれている。

上に青空が見えるのは、機体を天井から入れるために作られた穴の為らしい。

「あれを晒しておくれのは危険」

そう言いながらほのかはスザクの額から落ちた濡れたハンカチを拾い、機体にかけて干した。

（俺、気絶して……？ほのか、介抱してくれたのか？）

「はい、これ

そう言つて手渡されたのは学校の購買でよく見かけるパンビジュー
ースだった。

「お金は後で払う」

どうやら無断で持つてきたらしく。まあこの状況で金のことはどうかく言われまい。スザクはそのことよりも、至れり尽くせりで何もしていいない自分が情けなくなつた。

しかし腹は減つていたので、とりあえずありがたく頂くことにした。

「それで、状況は？」

ほのかはとつとつと話しだしたが、その内容は芳しくなかつた。

今のところ、市内は壊滅状態な上、ジャマーヤミノフスキー粒子が戦闘レベルの濃度でかかるて連絡は不可能。
さらにまずいことに、この機体はオープ軍の最新鋭機らしく、最高機密に属するらしい。

「こんなものを持つてたら……」

「確実に狙われる……」

「はあ……」「

最後の溜息は同時についてしまつた。しかしそんな一時の考える時間も天は俺たちに与えてくれなかつた。

ズド―――ッン――!

もの凄い爆発音と共に体育館の一角が崩れ落ちた。スザクはとつ

さにあいつに飛びかかり、何とか押し倒して機体の影へと隠れた。

背中をひりひりと熱風が焼いたが、何とか下敷きにしたほのかは守り切れた。かく言うスザクも怪我は特にしないみたいだ。

体を起してそれを確かめていると、ほのかはすぐに立ちあがつたかと思つたら、いきなりスザクを抱え上げコックピットに放り込んだ。

「どわあつー？ いてつ……何すんだよー？」

スザクが思いつきりぶつけた後頭部の痛みをこらえながらなんとか声を絞り出すと、すでにあいつも席についてシステムを立ち上げているところだった。

そしてモニターが出るとそこには2機のジン、1機のダガー、そして3機のザクがスザク達を捕捉している。

スザクがすぐさま席にちゃんと座ると同時に、ほのかは機体を発進させた。

その瞬間、敵機からの一斉射撃！

今のところランダム回避で何とか避けれているが、撃ち落とされるのは時間の問題だ。そんな時、何かないのかと探していた俺は手当たり次第にモニターを操作して、うつかりMODE CHANGE Eというボタンに触ってしまった。

その瞬間、

「な、なんだ」「いやー！？」
「つーっ！」

スザクは驚きの声を、あいつは声には出さなかつたが、同様に驚

いたようだ。

そう、機体が変形して、モビルスーツになつたのだ。モニターに映し出された機体の構造を見てガンダムタイプなのがわかる。

「だから、フューリックスガンダムなのか……？」

スザクはモビルスーツに変形したことに驚いていたが、あいつが驚いた点はそこではなかつたようだ。

「ん？ なんで動かさないんだ？」

スザクは変形した後空中で浮かんでいるだけで何もしなほのかに疑問を持つた。

そしてその答えはすぐに返ってきた。

「今コントロールできるのはあなた……」

「へ？」

スザクは最初にほのかが何を言つているのかわからなかつた。しかし彼の手が操縦桿に触れると、一気に機体が敵目がけて急降下していった！

「えええええええええつー！？」

スザクは大声を上げながら、（不本意ながら）敵に突っ込んで行つた。

- - - - -

「ちよつ、ちよつとたんま―――――！」

スザクは何とか機体を上昇させようとグリップを握るが、ビッグやら逆効果で突つ込むスピードを速めてしまつたらしい。

しかし幸運にも、この特攻には敵も驚いたのか、砲撃を弱めて一時後ろに後退して距離を取る。

その一瞬のすきを待つていたのか、ほのかは力チャカチャと音が聞こえるくらいの素早さでキーボードを叩きはじめた。そして、翼が展開したかと思うと、その先から無数の小型の羽のような物体が射出された。

「フェザーファンネル。」これで、何とか逃げ切る……！

「ファ、ファンネルって確か、覚醒者とかニュー・タイプにしか使えないんじゃ！？」

ファンネル、無線式の小型ビットを操り、オールレンジ攻撃ができる特殊兵装のことだ。確かに前の戦争でキュベレイという機体が装備して、無類の強さを誇つたらしい。しかし、ファンネルにはニュー・タイプと呼ばれる人種や、宇宙覚醒者しか使えなかつたはずだ。

しかし、実際に無線式のビットが敵に多方向からビームの雨を降らせている。理屈はわからないが、これなら……

「倒せる！」

スザクは希望を見出した声で叫んだ、が……

「無理。足止めにしかならない……」

ほのかの一言で現実に戻された。

最初の不意打ちでジン1機を行動不能に、ザク2機の手足を吹っ飛ばした……。だが、いかんせんファンネルのスピードが遅く、直ぐに体勢を立て直した相手は、次々とファンネルは撃墜していった。すでに3つ墜とされている。

(「のままじややられるー?」)

「だから……早く逃げて」

「」(J) ようやくほのかの声が少しつらそうな感じに気付いた。いつもならどんなに辛くとも痛くてもポーカーフェイスを貫き通しているのに、今はモニター越しにでもわかるくらいうしげな表情を滲ませている。

「お、おいつ、大丈夫か!？」

スザクが叫ぶと同時に、さらに4つのフェザーファンネルが撃ち落とされた。

残り3つ……

「早く……離脱、して……」

スザクは何とか心を落ち着かせ、操縦桿を握りしめた。しかしそんな大きな隙を敵が見逃してくれるはずがなく、残っていた敵が一気に飛びかかってきた!

(逃げ切れるか!?)

スロットルを全開にして一気に逃げきったとしたその瞬間！

ズドーーーン！

目の前まで接近していたジンとザクの手がヒートホークと剣」と吹き飛ばされた！？墜落していく2機に気を取られたダガーは、頭を撃ち抜かれ同じ道をたどつていく。

スザクは何が起こったのかわからずスロットルをにぎつたまま一瞬動けなかつたが、直ぐに自分の背後の画像を呼び出す。

するとそこには1機のマントをした正体不明のモビルスーザンしき影があつた。さらに拡大してその謎の機体を注視しようとした瞬間……

「な、なんだ！？」

急に機体が下に引きずられ始めた。慌てて下を見てみると、そこには絶望的な光景が広がつていた。

「あ、穴が……そ、そんな、うそだろ……？」

コロニーの大地を構成する側壁に、巨大な穴が開いていたのだ。

「 やだー…やばー…せばー…ばせー…？」

謎のMSが撃ち墜とした敵がロロニーの壁にぶつかりできた穴、それにどんどん吸い寄せられているのをなんとかして避けようと、スザクは先ほどから機体を動かそうとしているのだが……

「 なんで……なんで動かないんだよー…？」

操縦桿を握つてもピクリとも動かないし、モニターに至つては外の景色を映すだけでそれ以外はウンともスンとも言わない。

そしてとうとう、何もできないまま機体が外に吸い出され、宇宙へと放り出されてしまった。そのまま姿勢制御もできず、機体はゆっくり回転しながらロロニーからどんどん離れていく。

「 くそつ、どうすりゃいいんだ……」

コソソールを吊きながら悪態をつくも、それで状況がよくなるわけではない。

しかし、わかつていってもノーマルスーツすら着ていないので、この狭いコックピットの中では他にどうすることもできない。

さらに気がかりなのが、先ほどから返事の返つてこないほのかのことだ。戦闘が終わってから何度も呼びかけているのに返事がなく、代わりに苦しそうな息遣いが聞こえてきくるだけで、どう考えても早急に病院へ運ばないとまずい状態だ。

「 なにも……なにもできないのかよ……」

スザクの咳く音葉が虚しへ「コックピットの中に響き、絶望に満つていると……

ガクンッ！

「な、なんだー！？」

突然機体に衝撃が走った。デブリにでもぶつかったのかとスザクが慌ててモニターを見ると……

「パイロット、生きてるかい！？」

接触通信で流れてきたのは勝氣そうな女の子の声だった。

「せ、戦闘機！？」

いつのまに接近していたのか（まあレーダー類もダウンしていたので、気づかないのも仕方のないことかもしれないが）赤と青のコントラストが派手な戦闘機がワイヤーを射出してこちらの機体を牽引しているのだ。

「な、あんた誰だよ、いったい！？」

スザクが慌てて尋ねると、訝しむ様な声が返ってきた。

「子供……？まあ、いいや。それより、あんたの機体は狙われてるから、こっちで一回回収するよ。しっかり掴まってな！」

「え、ちょっとま……」

スザクは訳が分からず詰問しようとしたが、次の瞬間襲いかかっ

てきた凄まじいGにより意識が遠のき、本田一度目の気絶をしてしまった。

「……で、こいつはただの一般人なの、ドクター？」

「ああ。コロニーのデータベースにも名前がある。あっちのお嬢さんはコーディネーター、それも少々特殊な部類に入るらしいが、それでも軍属ではないな」

「へえ、特別か……まあでも、だからって民間人が乗ってるってのはやっぱり変だよな。だいいち、機体を起動できるわけないし……」

頭がぼおつとする中、重い瞼を何とかうすら開けると、田の前に白い天井が広がっていた。

「あ、起きたみたいです」

白い天井という味氣ない景色に、いきなり女の子の顔がビアップで割り込んできた。

透き通るような白い肌に、腰まで伸びている茶みがかつた黒髪の少女がくつきりとした大きな瞳で俺の顔を覗き込んでいる。

スザクと田を合わせること数秒、彼女は近くで話している人達の方へと駆け寄つていった。

「……は……？」

スザクがダルイ体を起き上らせると、手に点滴が繋がれているのに気付いた。

「それは唯の栄養剤だ。別に変な薬ではないので安心したまえ」

金髪を短く切りそろえ、メガネをかけ白衣を着た学者然とした男がマグカップを片手にこちらに歩み寄ってきた。

「私はテクス・ファーゼンバーグ、この艦のドクターだ。ま、コーヒーでも飲むといい」

スザクは点滴を取り外されながら渡されたマグカップに言われるがまま口をつけた。「コーヒーの程よい苦みが口の中に広がり、頭が覚醒しているのを実感する。

そしてその時やつと、隣のベッドで眠っているほのかに気付いた。

「ほのか！？」

慌ててベッドから飛び降りようとし、コーヒーをこぼしてしまふ。

「あちつー？」

「おいおい、大丈夫かよ？」

聞いたことのある勝気そうな声がドクターの後ろから聞こえた。そこには短くさつぱりとした黒髪に元気いっぱいの猫のような輝きを宿した瞳、出でるところが出でている俺と同じ年くらいの少女だった。

「ほひよ

近くにあつたタオルを手に取りこしらに放り投げてきた。

「あ、ああ……ありがとう」

スザクはこぼしてしまったところを拭きながら、その少女のことを感じと見つめた。

「ん、なに？」

「いや、もしかして俺たちを助けてくれた戦闘機に乗つてたのって、君かなつて？」

その問いに対し、少女は胸を張つて答えた。

「そう、あんたたちを助けたのはこのあたし、パーラ・シスが駆るGファルコンさ！ よーく感謝するんだよ」

「別にこいつらを助けたわけじゃないだる。あくまでガンダム回収が依頼だつたわけだし」

「う……っとパーラの言葉を詰まらせたのは小柄な体躯に乱雑に切られた黒髪、抜け目なさそながらもどこか気軽に接せられる雰囲気をしている少年だった。

「俺はガローデ・ラン。この船、フリーダムの専属パイロットだ。よろしくな」

スザクはタオルをいつたん置き、差し出された手を握つた。機械仕事をしているのか、固くてごついとした手だった。

俺の柔らかい手とは大違いだな……と思いながら、幾分余裕が出てきた中、スザクはドクターに静かに尋ねる。

「で、ほのかは大丈夫なんですか？」

ドクターは少し難しい顔をしたのを見て俺は息をのんだが、しかしドクターはすぐに少し笑つて答えた。

「外傷はないが、極度に脳を使つたらしく疲労が激しい。ただ、命に別状はない。もう数時間もすれば起きるだろ?」

その言葉にスザクはぱはーっと大きく息を吐いた。

「よ、よかつたあ……」「…」

(あ、やべ、涙でそう……)

スザクは慌てて氣を引き締めて、こちらを見ているみんなに向き合つた。

「それで、最初の質問に戻りますけど、ijiはijiですか?」

スザクとほのかが今いるのはフリー・テンという船の中らしい。所属はジャンク屋組合で、ガロード達は付近を航行中にヘリオポリスのテロのことを聞きつけ、脱出ポットや簡易バリアフィールドに入っている人がいかどうか搜索に来たそうだ。

その時、彼らの馴染みの傭兵部隊が、テロ組織が俺たちが乗つていた機体を狙つていることを知らせてきたそうだ。そしてその機体をテロリストたちに先んじて回収するのに協力して欲しいという要請が入り、搜索を始めた時にたまたまパーラが漂流しているスザク達を見つけたそうだ。

「ちなみに、その傭兵部隊の方たちは信頼できる方達ですし、オーブから直接依頼を受けているそつなので、罠やテロリストの仲間という線はないと思います」

目が覚めた時に俺の顔を覗き込んでいた少女、ティファ・アディールが後からやつてきたフリー・デンの副官、サラ・タイレルさんのしてくれた説明に最後に付け加えた。

「で、これから俺たちはどうすればいいんですか？」

軍の最高機密に属する機体を見てしまったどこか、あまつさえ操縦して戦闘行為をしてしまったのだ。

前大戦時の連邦などのHースのうちの何人かが、戦闘の場に居合わせた民間人の少年という都市伝説を聞いたことがある……

（俺たちも幽閉されるか軍属にさせられるか、あるいは最悪秘密裏に殺されるなんてことも……）

「それはどうなるかまだわかりません。ただ、せっかく助けた命をみすみす見殺しにしようとは思いません。できるかぎりのフォローをするつもりだから、安心して」

サラさんの言葉が不安に包まれた心を幾分楽してくれた。

「まあ大丈夫だろ。色々頑張ってごまかせばー」

「そのごまかすのが纖細な作業で大変なんだつづの」

「なんだよガロード。じゃああんたはその纖細な作業とやらができるのかよ?」

「うつ、それは……」

ガロードが言葉に詰まると、横からティファアが口を挟んだ。

「ガロードに任せたら、力づくになっちゃうよ」

「ティファア」

「あはははは

ガロードの情けない声と笑い声が病室に響く中、俺はちりつとほのかの寝顔を見つめた。

これからどうなるかわからんけど……

（とりあえず、俺が守んないとな……）

心中で固く決意をしたスザクは、話の輪に再び加わった。

「艦長、リ・ホームはあと40分ほどで合流できるそうです」

「医務室からブリッジに戻ったサラは、副官席に備われた端末に指を滑らせながら、艦長席に座る男、ジャミル・ニードに次々に報告していく。

「ベリオポリスの被害状況は港が半壊、工場や都市部もかなりの被害を受けたそうですが、幸い人的被害は出ていません」

「へー、あんだけ派手に暴れてたわりに、意外と被害少ないんだね

オペレーターを務めるニアが不思議そうに呟いた。

「まあ敵の目的があのガンダムだつたんなら、攻撃は派手にやるだらうけどそれは全て搖動で、實際の被害はそんなに大きくないんだろ。これがコロニーの破壊目的だつたらあれほど派手なことになる前に沈めてるだらうし」

トニアの疑問に的確に回答したのは人当たりがよく、戦艦を自分の手足のように操る操舵手のシンゴ・モリだ。

「そうだ。そして、旧式ながらもあれだけの戦力を揃えられ、あの機体を狙うと『う』ことは……」

「まさか、どこの組織か軍が関与していると？」

サラがハッとした表情をし、クルー全員の顔が強張る。

「その可能性は捨て切れんということだ。そして、巨大な組織が関与しているのなら、このまま機体を見逃すことはしないだらう」「つていうことは、この船今結構やばいってことじやない！」

トニアの発言に、その場にいた全員が黙り込む。

「そん時のために俺らがいるんだろ」

急に話に入ってきた声の主のほうへと全員が振り返る。そこには2人の男が立っていた。

「ちょっと邪魔するよ」

「あなた達、今は第2種警戒態勢だから、パイロットルームに居つて言わなかつたかしら？」

サラが棘を含んだ声で言うと、後から入ってきたキザッぽい男、

ロアビィが肩をすくめながら答えた。

「あんなどころにいても気が滅入るだけだし、それにちよつと気になることがあつてね……」

「気になること?」

「おひよ

最初に入ってきた男、喧嘩っぽやそうな感じのウイッヂが話しきを継が、手に持っていたCD-ROMをトニアに手渡した。

「それは?」

「キッドがあのお子様たちが乗つてたガンダムを調べてたら、偶然見つけたんだけど、これがちょっとやばいっぽいシロモノなんだよね」

いつもの軽いノリで話しながらも、真剣さを含んだ声はその場にいた全員を引き締めた。

「じゃあ、モニターに出すわね

しかしトニアがCD-ROMを入れようとした瞬間……

ヴィー、ヴィー、ヴィー！

警報と同時に、船体の横をミサイルと粒子ビームが掠めていく。

「敵か!?」

ジャミルが叫ぶと同時に、サラとトニアはそれぞれの席へ、ウイツツとロアビィは地面を蹴り宙に浮かびながらドアを抜け、パイロ

ツトルームへと向かっていった。

「敵の所属と規模は？」

「敵所属……不明（unkown）一数は……ダガータイプのモビルスーシーとアーケンジョンジール級1、ドレイク級1です！」

「連邦か……？」

「警告もなしにいきなり撃つてくるなんて！？」

「隠密作戦にしては中々の数だな……シンゴ、逃げ切れそうか？」

「無理ですよ！急な召集で燃料も充分にありませんし、今は前回の仕事の為に機体を積めるだけ積んでいる上に、おまけのガンダムまで乗つけてるんですから！」

舵をめい一杯切つて田の前に現れた中型のテブリを避けながら、今出せる最大速度でフリーデンを駆りながらシンゴは叫んだ。

「リ・ホームとの合流ポイントまでの時間は…」

「リ・ホームもこの畠域のミノフスキ濃度とジャマーに気づいてるでしょうから……ここはテブリが比較的に多い地帯なので、急いで合流しようとしても20分ほどはかかると思われます」

（20分……この艦に搭載されている戦力とテブリの多い地形を鑑みれば……ジャミルは思考を駆け巡らせ、一瞬の内に最善の策を叩き出した。）

「よし、モビルスーシー部隊はGファルコンと共に出撃、リ・ホームと合流するまで時間稼ぎをしてもらひ」

「了解！パイロット、聞こえましたか！」

サラが耳につけたマイクに向かってしゃべると、モニターがついで格納庫が映し出され、そこにはロアビィ達がいた。

「ユウちはガロード達がまだ来てないけど……ロアビィ、ウイッシュと私は準備OKよー！」

サラの問いにテキパキと答えたのはノーマルスースを着ているエニル・エルだ。

「まったく、あの子たち、何してるのかしらー？」

サラが手元の端末を操ってガロード達の居場所を特定しようとしました瞬間……

「わりい、遅くなった！」

大慌てで格納庫に駆け込んでくるガロード達の姿がモニターに映し出された。

「遅いじゃない！早くノーマルスースを着て、出撃準備！」

サラは一喝した後、短く指示を出す。

「了解！」
「わかつてますよつとー！」
「すみません……！」

3者3様の答えを返して、急いでノーマルスースを着るためにパイロットルームに駆け込んでいく3人。

「では準備ができ次第各機発進してください。その後はいつも通りの組み合わせで！」

「 「 「了解！」」

その場にいた全員が答え、格納庫が慌ただしく動き始めた。

漂流・救助・襲撃（後書き）

不定期になるとおもいますがこれから更新していくので、気に入
つていただけたらまた読んでください。

戦闘01（前書き）

久々に更新です。

「あの艦に例の機体が回収されたのは本当なんでしょうか?」

現在中立組織であるはずのジャンク屋組合に所属する艦フリーデンを強襲している部隊の艦の船長、ナタル・バジルールが隣の席に座っている男、オブザーバーのマルタ・アズラエルに無表情のまま慄懾に尋ねた。

「五分五分といったところかな……。ですが、それで十分じゃないですか? 所詮ヴァルチャー(ジャンク屋に対する蔑称)、墜としたところで、どうとでも」まかせるでしょう?」

気障っぽい仕草をしながらやにや笑うアズラエルに対し、嫌悪感を出さないよう気に付けながらナタルはさらに続ける。

「しかし、本当に先ほど」説明頂いたような機能を持つた機体があるんでしょうか? もしも……」

「あー、艦長、あなた達軍人の役目はなんでしたっけ?」

ナタルの言葉を面倒くさそうに遮ったアズラエルの問いに、ナタルは簡潔に答えた。

「任務を遂行することです」

その言葉に、アズラエルは皮肉を込めた笑みを浮かべた。

「そう、あなた方軍人は上からの命令に従えばいい。そして、この場合の上とは僕のことです」

「はっ！……心得てます」

「ならないんですよ。あなたの腕は買つてるので、戦闘の方は全面的に任せますよ」

そしてアズラエルは言い終えると同時に徐に立ち上がり、まるで劇を仕切る監督のように大仰に手を広げた。

「さて、宇宙に巢食う^{できそこなう}宇宙覚醒者と、化け物^{コーディネーター}どもを一掃できる武器を手に入れに行きましょつか！青き正常なる世界のために…！」

その言葉はブリッジに飛び交うクルーの緊迫した声の中、虚ろに響き渡った。

「ハッチ解放、各機、準備でき次第発進しちゃっていいわよー。」

トニアの声を聞きながら、ガロードは機体のシステムの立ち上げが終わり出撃を待つばかりだった愛機GX-D（ガンダム×ティバインダー）をカタパルトに立たせた。

「ガロード・ラン、GX、行くぜえ！」

勢いよく艦から飛び出したGX-D。

「ティファ・アディール、GFA（GフルコンAWACS）行きます！」

続いてティファのGFAが宙へと飛び立つ。

「ティファ、ドッキングだ！」

「はー！」

ガローデの声に答え、ティファはGXと相対速度を合わせ、GFAを分離、GXを包み込むようにドッキングする。

「そんじゃ続いて、ロアビィ・ロイ、レオパルド、ちよっぴり出していくよー。」

「Hーール・Hーール、GFB（Gフルコン・ブースト）行くよー。」

続いてロアビィとHーールペアも機体を駆り出す。

「じゃあ次、ウイック、しつかり仕事してきてよー。」

「うむせえなあ。わかつてゐつづーのーーウイック・スー、Hアマスター出るよー。」

ニアにて言ふわれながら、続いてウイックのHアマスターも戦闘機形態で出撃する。

「じゃ、ウイックのことお願いね、パーー！」

「任せときなつてーーGFC（Gフルコン・コンバット）パーー・シス、出るよー。」

ニアとのやり取りを置き土産にパーーのGFBも宙へと飛び立つ。

レオパルドはGFBと、HアマスターはGFBとドッキングし、展開する敵モビルスーツ部隊に突入していく。

「ティファ、ドッキング・アウトだ！その後は後方で支援してくれ

！」

「わかった！」

ティファは応じると同時に機体をドッキング・アウトしてGFAをGXDから切り離し、後方に待機してAWACSの性能をフルに使って敵の情報収集を始めた。

「敵は高機動タイプの機体で編成されます！火力はビームライフルのみみたいですが、かなり高度な連携をとっているので、気を付けてください！」

「で、どう攻めるつもりだい？」

火力重視のGFCをエアマスターにドッキングさせて駆つているパーラが現場の戦術指揮官であるティファに尋ねた。

「3機とも右翼の敵に対し一斉射撃してください。その後、一気に右翼を切り崩して一時後退、牽制しながら・ホームとのランデブーポイントまで持たせてください！」

「なあーるほど。一気に攻めると見せかけて、持久戦に持ち込むつてわけか」

「ま、確かにあいつらが加われば、相手の数が数十倍だらうと負ける気はしないわね」

ロアビィとエニルも口々に作戦に同意していく。

「うし、火器の方は任せるぜ、パーラー！」

「おうよ！」

「そんじゃ、こっちもいきますかね、エール！」

「ちゃんと狙つて撃つてよね！」

「みなさん、後10秒で射程圏内に入ります！」

ティファの言葉を合図にGXDは背部に装着していたディバインダーを解除して手に持ちハモニカ砲形態にして構え、レオパルドはGFBとドッキングしたまま高速機動形態からMS形態に変形し体内にある砲門を開き、エアマスターは戦闘機形態のままドッキングしているGFCに搭載されている火器を起動させた。

「さて、なんとか持ちこたえられるかな……？」

ドクターことテクス・ファーゼンバーグは医務室に備え付けるモニターを見ながら呟いた。

医者である身では戦闘には関わらないが、自分の戦いが戦闘が終わつた後にあるのを自覚しているので焦りや憤りは無い。

例え機体を破壊されたとしても簡易バリアフィールドを常備しているパイロットは死ぬことはほぼありえない。問題は、発動するほど生命の危機に瀕しているわけではなく、かといって軽傷ではない時の場合だ。

しかし、生きてさえいれば何とかする自信はある。数十年前の戦争やテロによる被害者は即死やどうにもできないような重傷の患者がほとんどで、どれだけ医療が進んでもうようと、どれだけ医者の腕が良かろうと問答無用の死か、良くとも一生引きずるような怪我や

欠損を押し付ける現場が普通だったが、今ではそんなことはほとんどない。だからこそ、純粹に医者の技量が問われるのだが……。

そんな考えに耽っていたためか……いや、彼も数多くの戦場やそれに準する場所で医療行為をしてきただけあって、危機察知能力は半端ではない。にもかかわらず、後ろに立たれたことに気付かなかつたのは背後に立つた人物の並みならぬ技量のためか、それとも……

ドクターは「ん？」と何かに気づき後ろを振り返ろうとしたが、すでに遅く手刀は的確な位置に当たりドクターの意識を刈り取った。

「ふー、やれやれ、新型のウインダム20機を投入して、MS數機と戦艦1隻墜とせないとねえ……」

アズラエルがやれやれといったように肩をすくめるのに対し、ナルは淡々と答えた。

「敵は先の大戦時に連邦が極秘裏に開発したワンオフの機体に乗っています。加えて支援機体と合体していて火器増強されており、なかなか手ごくなっています」

「ま、言い訳づくりなら政治家でもできますけどね」

アズラエルが皮肉な笑みを浮かべ、続けた。

「君は軍人なわけだから、できませんじゃないんだよね」

「承知します。そこでアズラエル司令、あの3機の出撃許可を頂

けないでしょうか？」

「あの3機……ふむ……ま、いいでしょ。丁度戦場も煮詰まつてき
たみたいですし、『』『』でフィナーレに向けて新たな役者を入れる
のも」

そう言いながらアズラエルは端末を操作し、モニターに浮かび上
がった人物に一言二言告げた。科学者然とした男は頷き、モニター
から消えた。

「さて、それでじゃあ最終章の幕開けと『きましおつかね、みなさ
ん！』

くくくと笑いながらアズラエルが放つた悪意に満ちた言葉が粘
りつくようにブリッジにいる全員に絡みついた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「おらおらあ！」

MS形態になつて『』のHアマスター+GFCの砲撃が敵機を回避
に専念させている。

「そこだあ！」

回避する先を読んだガロードがすかさずGXDを駆り、上段に構
えたビームサーベルを振り抜き、敵の右腕をビームライフルごと切
り落とした。

「そんじゃ、ドミノヒート！」

機体のバランスを崩した敵に、高機動形態のレオパルド+GFBから放たれたミサイルが殺到し、一気に左足と背部のジョイントストライカーをもぎ取っていく。

「敵半数撃破、残り10機の内3機は半壊、4機が戦闘続行不可能のためバリアを回収しながら下がっていきます！」

ティファの言葉通り、腕やら足、頭が欠けた敵機が宙に浮いているピンク色に光る球体を回収しながら下がっていくのが見える。

「意外とあっけなかつたな。これじゃあ、リ・ホームと合流してもあんまり意味ないんじゃない？」

「何言つてんのよ。まだ6機いるんだから、ちやつちやと手づけて終わらせるわよ…」

高機動形態のレオパルド+GFBに乗っているロアディの軽口を同じく搭乗しているエニールが奢める。

「でもさあ、ほんとにあっけなさ過ぎだよ。」

「ま、こちどらガンダムタイプの上にバイロットがいいんだ。そんじょそこの野郎に後れは取らねえよ…」

MS形態のエアマスター+GFCに乗るウイッシュとペーラもすでに戦勝気分らしげ、氣楽気に話している。

「待つてください……回収される機体に入れ替わりに別の機体が出てきました……これは……ガンダム？」

ティファが捉えた映像がすぐさまレーザー通信で各機体へと転送される。

「レイダー、カラミティ、フォビイドゥン……前大戦時の機体を改修したものか……？」

機械全般に詳しいガロードが、送られてきたデータと以前用にしたことがあるデータと細部が違つてることに気がつき、呟いた。

「なんでもいいぜ！ ちょうど物足りなかつたところだ。相手してやるぜ！ パーラ、ドッキングアウトだ！」

「ちよ、ちよっとー？」

パーラの驚きの声を無視して、ウイッシュはエアマスターをGFCからドッキングアウトして、戦闘機形態に変形。

「たつくもう、なんでそう血氣盛んなのかねえ？」

「つて、あんたもドッキングアウトしてるじゃない」

ウイッシュの先走った行動に対し呆れた表情をしているロアディも、いつのまにかレオパルドをGFBからドッキングアウトしていた。

「ま、どうやらあれで最後みたいだし、カッコイイところ見せる最後のチャンスなんだね。というわけであの6機はよろしくう！」

そう言い残し、バーニアを吹かしてレオパルドはエアマスターを追走していくた。

「つたくもつ、あいつらは…」

パーラが悪態をついたのに対し、ティファが冷静に返した。

「たぶん、二人はあの3機のガンダムが危険だと感じたんだと思います。だから、自分たちが引き受けようと…」

「ま、そんなどこりでしうね。まったく、カッコつけたがりなんだから……」

ヒールがため息交じりに呟く。

「ま、俺たちがちやつちやと残りの雑魚を倒して、ウイツツとロアビィの援護に行くか、母艦を叩けばいいって話だぜ…」

ガロードが気合を入れる掛け声をあげ、ディバインダーを構えハモニカ砲を残つた敵へと向けた。

「ああ、めんぢくせー…」

フォビドゥン操るシャニ・アンドラスはMS形態から戦闘機に変形したエアマスターが撃つてきたビームをエネルギー偏向装甲『ゲシュママイティッヒ・パンツァー』で捻じ曲げ、あらぬ方向へと逸らす。

しかしその逸らしたビームはレオパルドと激しい射撃戦を繰り広げているカラミティに当たりそうになる。

「てめえ、シャーライ！邪魔すんじゃねえぞ、こりあー。」

何とか回避したカラミティを駆るオルガ・サブナックがお返しとばかりにスキュラを放つが、それをフォビドゥンはまた捻じ曲げ、今度は猛禽類のようなMA形態で同じく戦闘機形態になつているエアマスターとドッグファイトを繰り広げているレイダーを狙う。

「シャーライ！ てめえ、この野郎！」

レイダーを駆るクロード・ブルはエアマスターを追うのをやめ、機体をMS形態に変形させて破碎球『ミヨルニル』をフォビドゥン目がけて放つが、それもあっさり躲されその先に運悪くいたカラミティへとかすめた。

「クロード、お前も邪魔だ！」

カラミティがレイダーに容赦なくお返しのバズーカ砲を撃つ。

「おいおい、敵さん、一体何がしたいんだ？」

ロアビディが軽い口調ながらも信じられないこというように呟いた。

「そりゃ俺のほうが知りたいぜ……ま、なんにしろ仲間同士で潰し合ってくれるならそれに越したことはねえけどよ。いつしかとったら時間稼ぎにもなるしな」

ウイッシュも敵が敵に撃つ流れ弾に気を付けるという妙な状況に困惑して、積極的に攻撃できずにいた。

しかしその迷いによる躊躇いが致命的であったことを、突如遙か後方から起じた爆発により知らされた。

「今の砲撃はどこからだ！」

「真下からです！」

ジャミルの緊迫した声に対し、サラは衝撃で吹き飛ばされた体を端末の前まで戻し、慌てながらもなんとか答えを返した。

「被害状況は！」

「右翼機関大破！それ以外は……」

とサラが続けようとした瞬間、続けて巨大な赤い粒子ビームの奔流がフリー・テンに向かって放たれ、左翼に直撃した。

「左翼エンジンも大破……」

「手すきのものに消火を急がせろ！」

「キャプテン、これじゃ あ出力の半分も出せません！」

未だにメインエンジンは残っているが、そこを攻撃しないのは艦の中にある機体まで傷つけてしまうかもしれないからだろう。しかしメインエンジンが無事といつても、出力は30%以下までダウン。どう考へても逃げ切れる状態ではない。

「サラ、リ・ホームとの合流地点まであとどのくらいだ？」

「あと、5分ほどです！」

5分……ティファが最後に送ってきた情報によると、敵はガンダ

ム3機を新たに投入し、さらにここで新手が来るとは……

(少し危ないか……?)

ジャミルの中で一瞬不安が心の隅に滲み出てきたが、すぐに追い出し、思考をこの状況を開拓する方法を探るのに費やし始めた。

「くそ、フリー デンが！？」

ガロードは突然の爆発とフリーデンと自分たちの下にいきなり現れた戦艦に一瞬呆然としてしまったが、炎を纏いながら失速するフリーデンを見てすぐさま転進しようとする。しかしそこで残り2機まで減っていたウインダムに行く手を阻まれる。

「ティファ、パーラ、エニル、あの戦艦を迎え撃つてくれ！」
俺が食い止める！

ハモニカ砲を撃つた後、背部に装着しスラスターにし、代わりに右手にビームソード、左手にビームマシンガンを構えたガロードは、ビームマシンガンで1機を牽制、その間にティバインダーによる大加速で一気に残りの1機に近づき、瞬く間にビームソードで両断した。

「わかつたわ！」
「まかせときな！」
「気を付けて！」

ガロードが残りの1機をと戦っているのを尻目に、3機のGファルコンは新手の戦艦へと向かおつとしたのだが……！

「パーラさん、上に敵がいます！」

ティファアの慌てた声に咄嗟に桿を横に切ったパーラは、1秒前まで自分の機体があつたところに赤い粒子の閃光が駆け抜けるのを見た。

「な、なんだあ！？」

パーラが急速転回しながら上に目を向けると、そこには新たに3機の機体がいた。

1体は巨大な実大剣を手に持つオレンジ色をした近接型、残る2機は巨大な砲門を構えた黒い機体と、その後ろで砲門を支えるかのようにもう1機赤いのがいる。そしてその3機はどれも背部から赤黒い粒子を放出している。

「GN粒子……ソレスタークビーニングか……！？」

「ライブラリ照合……あれはスローネアイン、ツヴァイ、ドライです！」

ティファアの報告はその場にいた全員に衝撃を与えた。

ソレスタークビーニング……1年ほど前から戦争根絶を謳つて所構わず武力介入している私設武装組織で、ほとんどの国や組織にとつてはテロリストと捉えられている。

このソレスタークビーニングの特徴は、核やバッテリーに代わる新しい機関、GNドライブなるものを機体に搭載していることだ。GN

ドライブはGN粒子という特殊な粒子を生み出し、信じられないような機動性と高出力の火力を發揮する。しかしその性能は大部分が今を持つて謎に包まれており、各組織は「じぞう」のGNドライブ搭載機、ガンダムを狙っている。

半年ほどは4機のガンダムが武力介入を行っていたが、ある作戦を切っ掛けに新たに3機の機体が参戦した。しかし後からの3機が所属するチームは前者とは方針が違うらしく、それまで極力民間人に被害が出ないようにしていった前者のソレスタルビーニングと違い、後者の方は戦争と関係するとこを手当たり次第に破壊を繰り返している。

そして今頭上にいる3機は後から参戦した機体、つまり民間人だろうが中立組織だろうが問答無用で潰しにかかる厄介な相手というわけだ。

ガロード達を狙つた1撃は警告だつたのか、ライフルモードを解除した隊長機らしき機体が前に出た。

「こちらはソレスタルビーニングのトリニティだ。ジャンク屋所属艦フリーデンに告ぐ。そちらの艦が回収した機体を速やかにこちらへ渡してもらいた。譲渡を拒んだ場合には実力行使させてもらう。またそちらの艦隊も、例の機体はそうそうに諦めて帰還することをお勧めする」

「オープン回線から聞こえる若い男の声が淡々と言いたいことだけ言って、沈黙した。

「……で、どうあるんだい？」

一時的に硬直した戦場の中、エニールが誰に尋ねるでもなく呟いた。

「たぶん下の艦は彼らの母艦です。今の戦力では田の前の敵に加えて上下の攻撃を食い止めるのは難しいです……」

「じゃあ、あいつらを差し出せっていうのかよー！」

ティファアの答えにパーラが憤つて荒い声を上げるが、それに返せる言葉は誰も持つていなかつた。

「ちくしょう、ここまでなのか！」

ガロードが操縦桿を握る手を強め、悔しさに歯を食いしばつたその時！

「諦めるとはらしくないな、ガロード・ラン」

静かな声が遙か頭上、トリニティのさらに上からし、青い機体が閃光のように砲門を装備した機体に大剣で躍り掛かるのが見えた。

「つこのやろー！」

すかさず大剣GNバスター・ソードを持つオレンジ色をした機体が間に割り込み、大剣どうしがぶつかり合い激しい鎧迫り合いを繰り広げる。

「ガイ！？」

「遅くなつてしまない」

短く謝罪の言葉を述べ、ガイは愛機アストレイブルーフレームSを一旦オレンジ色の機体スローネットヴァイから離し、タクティカルームズを大剣からガトリングフォームにして牽制に弾丸をばら撒き、敵をその場に留める。

「ちくしょう、調子に乗りやがつてえ！ いけよ、ファングー！」

オレンジ色の機体の腰から6つの小型の物体が飛び出し、先端に赤い粒子を纏わせながらブルーフレームに殺到する。

凱はタクティカルアームズを背後に装着し直し、脚にしまわれたいた耐ビームコードティングされたアーマーシュナイダーを操りビームを弾く。

「ガイ、下がつて！」

さらに、遅れてデブリの影から現れた所々赤い塗装がしてある頭部にトサカの代わりにバスター・ソードが装着されたジンが、小型誘導兵器ファングに牽制のマシンガンを乱射した。

「ライジヤも、来ててくれたのか！」

「おっと、俺も忘れてもらっちゃあ困るぜ！」

いきなり目の前を巨大なデブリが通り過ぎ、GXDと近くで睨み合っていたウインダムにぶち当たり、遠くへと吹き飛ばした。

「レッドフレーム……ロウ！」

「待たせたな。間に合ひやうになかったから、MSだけでデブリを抜けて先に来た！ もう少ししたらリ・ホームも到着するぜ！」

ロウは言ふ終わると同時にレッドフレームパワードレッドを駆り、「おりや————！」と氣合の掛け声を上げながら手近にあるデブリをパワー・シンダーが生み出す馬鹿力で次々に掴んでは投げて、デブリの嵐を敵の艦に浴びせる。

慌てた目の前と下にいる3つの艦は回避運動をとるも、いくつか

の砲台や外装が破壊され閃光を生みだした。

「よーし。あたしらも畳み掛けるぜー。」

しかしそのパーラの気合いの声は、フリー『ンで起こつた新たな爆発によつて遮られた……

「今度はどこの攻撃だ！」

突然艦を襲つた衝撃に耐え、ジャミルは艦長席にしがみつきながら大声を張り上げた。

「外部からの攻撃ではありません！ 内部から、ハッチがビームで破られました！」

「なんだとー？」

（工作部隊が乗り込んでいた…………いや、それならまずはじめにブリッジを狙うはずだ。なら……？）

「フェ、フェニックスガンダムが発進しました！」

「何ー？」

「フェニックスガンダム、応答しろー！ 誰が乗つているー！」

「…………や…………た！」

「キッドかーどうした、格納庫でなにがあつたー！」

砂嵐が吹きあわる画面の向こうで、キッドの声がだんだんはっきりと聞こえてくる。

「……やられたーあの女の子だーあの子がいきなりノーマルスーツを着て格納庫に入ってきて、フニックスに乗つてしまつた」「そんな、ありえないー彼女は少し前まで起き上れる状態じゃなかつたのよー」

サラが驚きの声を上げるが、その驚きはキッドの次の発言でありに大きくなる。

「さらに悪いこと、あのガンダムぼーやも一緒に乗つてしまつたんだよね……」「なんですかー!?

「それじゃあ、あの子も共犯つてこと?」

トニアの問いに対し、やつと画面が復旧したモニターに映つたキッドが首を横に振つた。

「いや、一度機体のロックを外すとあのぼーやと一緒に色々こじつてたら、あの子がふらつとやつてきて、メインシートに座つたおこらを放り出してそのまま出でやつたんだ」

「つまり、あの子はただ巻き添えを食つただけってこと?」

「そうみたいだね。とにかく、いつかゲートを応急修理するから、あの機体のことなんか気に任せたよー」

そう言い残し、キッドは画面から姿を消した。

「でも、なんで逃げ出したのかしら? あの子?」

トニアの誰にするでもなく口にした疑問は答えられることなく、
アークエンジエル級が放ってきたローエングリンを避けることで再
びフリー＝デンは戦場へと心を戻した。

「おい、ほのか！聞いてんのかよ！早くフリー＝デンに戻るんだ！」

戦闘が始まって以来、キッドとスザクは何とかフューチャークスを起
動させようと悪戦苦闘していた。するとほのかがひょっこり現れた
のだ。

そしてスザクがよかつた……と、安堵する暇もなく、いきなりメ
インシートに座っていたキッドを放り投げ、自分がそこに座つてしま
った。

スザクは慌てて席を立とうとしたがすでに遅く、ほのかは俺とキ
ッド達がいくらやつてもできなかつた機体の起動を一瞬で行い、ビ
ームライフルでゲートを破壊し、宙へと飛び立つてしまつた。

「くそ、回線が繋がつてないのか？」

端末を操り、何度もAccess Denied（操作拒否）を喰
らうながらも、何とかメインシートとの回線を繋ぐことができた。

「…………な…………あや…………」

「なんだ……おい、ほのか！なんだって？」

回線が通じてしまはうると、だんだんほのかが何かを言つてい

るのが聞こえてきた。

「……逃げなきや、逃げなきや、逃げなきや逃げなきや、逃げなき
や、逃げなきや、逃げなきや、逃げなきや、逃げなきや、逃げなき
やー逃げなきやー逃げなきやーーー」

「ほ、ほのか!?」

ほのかの憑りつかれたかのような声に俺は気圧され、スザクは体を動かすことができなくなる。そして、その後の彼女の行動も、ただ見ていることしかできなかつた……

「な、なに……あれ？」

ティファはフリー・デンから飛び出してきた機体、フェニックスを見て心が芯から凍りつくような恐怖を感じさせられた。いや、与えられたというより、共有したと言ったほうがいいのかもしれない。ティファのニュータイプとしての能力が、フェニックスに乗る誰かの今の心境を感じ、同じ気持ちを味わ正在していのだ。

「いけない……彼女を」のままにしちゃー。」

ティファはGFAを駆り、虚空に佇むフュニックスへと向かつた。

「ティファ？」

ガロードがティファの行動に気づき、一瞬戦線を離れようとしたが、すぐにドレイク級が放つミサイルの対処へと奔走させられてしまい、追いかけることができなかつた。

「いったいどうしたん……なんだ、あれは？」

ミサイルをすべて撃墜した後、ティファが向かった方へと目を向けると、彼女が向かう方向に、戦闘が始まる前にキッドとなんとか調べようといじっていた機体が戦闘機形態で浮かんでいるのが見えた。

しかし、ただ浮かんでいるわけではない。あの機体の特殊兵装、フェザーファンネルが、まるで巨大な円を作るかのように不気味に佇んでいる。

そしてティファの「だめ――！」という声が耳元で響いたと同時に、その円の中心に黒い、全てを吸い込んでしまいそうな闇が生まれた。

「な、なんだよ、これ？」

スザクは目の前に現れた黒い靄の様なものを呆然と見ていたが、ほのかがそれに向かつて機体を進めだしたことによつて、ぞつとしたもののが体を駆け抜けた。

ニユータイプやら覚醒者の超感覚ではない。ただ、生きるものす

べてが持つ原始的な危機察知能力が今フルになつて俺の体全体、細胞のひとつひとつから警告してきている。『あれはまずい!』、と

……

「ほのか、おい！聞こえてんだろ！頼む、引き返してくれ！」

スザクの懇願とも聞こえる声に、しかしほのかはまつたく無反応で、ただ「逃げなきゃ……」と呟くばかり。

そしてフェニックスがフェザーファンネルを作り出している闇に触れそうになつたその瞬間！

ド――――――ンツ！

一筋の黄色い閃光が闇を切り裂き、フェニックスガンダムを吹き飛ばした！

「な、なんなんだよ、こんどはーー？」

スザクが慌てて後方のモニターを呼び出すと、そこには新たな機体が映し出されていた。

戦闘01（後書き）

Gファルコンのヴァリエーション（AWCAS・Boost・Combat）は今作オリジナルです。

改造好きのキッドやロウが所属するジャンク屋ギルドなら、必ずGファルコンも色々なタイプを作るだろうと思い、実装してみました。また、今作の主人公機、フェニックスガンダム0-2ndはフェニックス・ゼロとフェニックスガンダムの中間機という扱いです。

更新は今月中にはできると思いますので、気に入っていたらまた読んでください。

「あれは、Wガンダム……？」

艦長席に座るナタルがモニターに映っている2機、白と赤のコントラストが派手な機体を、新たに現れた白と所々青と赤に塗られ、鳥のような形をした戦闘機が攻撃しているのを騒然としたように見つめている。

「ほう、あれが例のテロリスト達の所持する機体ですか……」

アズラエルがモニターに映る機体を興味深げに眺めながら呟いた。あなたの御同類ですね……という言葉を呑み込んだナタルは、アズラエルの方へと顔を向けた。

「ここの状況では任務続行は厳しいと思うのですが……」「ま、ここはもう撤退してもいいでしょう」

いかがいたしましたか?と、続けようとしたナタルの言葉はアズラエルの意外な発言に遮られた。

「よろしいのですか?」

てっきりまた嫌味をネチネチ言われるかと思っていたナタルは、少し驚いたように尋ねた。

「ま、今回の1番の目的はあの機体が本当ひとつもいたような性能を持つているのかでしたしね」

アズラエルは手元にある端末を操作してモーターに先ほど「H-II クスガンダムが作りだした闇を映し出した。

「これが見れただけでも、今回は良しとしましょう。それに……」「それに……？」

ナタルが形式だけ尋ねると、アズラエルはニヤツと笑った。

「こ」のまま戦いが推移すれば、こちらがあの機体を捕獲しやすくなりそうですからね」

そう言いながらアズラエルが見た先には、暗い宇宙では太陽の次に眩いばかりに明るい青い星、地球があつた。

「な、なんなんだよ、もつ……勘弁してくれよー!？」

思わず泣き」とのような言葉を漏らしたスザクは、人型に姿を変えたフェニックスを操縦し、新たに現れた敵から唯ひたすら逃げていた。

ファンネルを巨大なビームで吹き散らかされたと同時に声を途絶えさせたほのかは、未だに意識はあるようだが動けないようで後ろから敵が第2射を撃つてもなされるがままで、機体を動かす気配がまったくみられなかつた。もし、スザクが人型時に操縦できたことをとつさに思い出し、なおかつ運よく一発で変形させられなければ、お陀仏だつただろう。

あの恐ろしいほど巨大なビームライフル（いや、確かあれはバスターライフルと言つたつけ？）も弾の温存の為かあれから撃つてこないので、一瞬で蒸発させられることはなさそうだが、それでも追われていることには変わりなく、今も相手は牽制のマシンガンを撃ちながらどんどん近づいてきている。

「クソッ！」

スザクは機体に搭載された優秀なAIのランダム回避に助けられながら、なんとか弾幕を避けながら前へ前へと進んでいたが……

ラーニング・ラーニング・ラーニング!

「な、なんだ！？」

いきなり鳴り始めた警報に呆気にとられた俺は、今まで穴があくほど睨んでいた後方の映像から前方の映像へと目を向けてた。

「……」

スザクの眼前には青い星、地球が広がっていた。

「相手は素人か……？」

Wの「ツクピットに座るヒイロ・ユイはマシンガンを撃ち続けな

がら眩いぐ。

今回の任務は新型モビルスーツの撃墜。いつもと同じ通常の任務だ。他勢力が介入しているのはイレギュラーだったが、それもたいしたことではない。AIに頼りっきりのランダム回避も、やりやすい相手というだけだ。

なのに……

「なにか、気になるな……」

数多の作戦を遂行してきたヒイロだからこそ嗅ぎ取った予感。目標が持つ力が今ここで潰しておかねばならないものだという警告を本能から受け取ったヒイロは、真っ直ぐな瞳を目の前でフラフラ地球に向かって飛ぶ機体へと向けた。

「お前を、殺す……」

その言葉が聞こえたかのよつて、標的はさすがにスピードを上げた。

「まよい、このままじゃ地球に墜ちちゃうー。」

スザクは今まで警笛に気が付かなかつたことを歯ぎしりしながら悔いたが、後ろから攻撃されていたのでは前が疎かになるのは素人なら当たり前のことだ……と、頭の中の変に冷静な部分がツツコミをいってきたが、今はそんな今更な上ごどつでもいいツツコミよりも

「クソツ！引つ張られる！？」

前は地球（つていうか、この機体単独で大気圏突入できるのか？……スペック上はなんとかできるみたいだけど……）、後ろは敵と、このとんでもない状況をなんとかできる案を探したが……

「そんなの、都合よく見つかるか！？」

所詮素人、ここまで逃げられたのが運が良かつたのだ。そして、その運すら……

ド――――――ンツ――!

「うわあ―――！？」

機体に衝撃が走る。スザクが衝撃でヘルメット内でシェイクされた頭をなんとかモニターに向けると、そこには右翼の先が砕け散っている姿だった。こんな状態じゃあ大気圏突入なんて……

ガクンツ！

ビーツ――ビーツ――ビーツ――ビーツ――

先ほどよりさらに大きな音で鳴り響いた警告音に急かされモニターを見るスザク。

「うつ、ウソだろ……？」

そこには重力に捕まり、脱出不可能という文章が淡々と書かれていた。

「地球に降りる……いや、墜ちるか……」

相手の片翼に大ダメージを与えたヒイロは、すでに地球の重力に引かれて満足に動くこともできない目標に向けてバスター・ライフルを構えた。

「任務、完了……」

ヒイロの淡々とした言葉と共に、バスター・ライフルが撃たれようとしたその瞬間！

「何！？」

後ろからの敵襲を知らせる警報より一瞬早く敵の殺氣を感じ取ったヒイロは、機体を人型へと変形させながら後ろへと向け、盾を構える。その瞬間、いく筋ものビームが宇宙に浮かぶ塵を焼き、ピンク色の線を引きながらWガンダムへと殺到した。

「やられるとかよ！」

オープン回線で入ってきた声の主が駆る機体は、今回の任務に入している勢力の内の一つ、ジャンク屋に所属するGXの改良型とその支援機、GFだった。

「ガローダ、ドッキングアウトするね」

ティファは言つが早く、GFをGXDからドッキングアウトした。

「ティファ、どうするつもりだ！」

すでに地球の重力に捕まつてゐる二人を救う方法は一つしかない
と知りながら、ガローダは尋ねた。

「私が行つて、助ける……」

一瞬画面越しで二人の間に無言のやり取りが行われた。そして……

「そつか……じゃあ、俺があいつを足止めしちゃよ。気を付けて！
「わかった。ガローダも……！」

一人はそれだけ言つと、ガローダはWガンダムへ、ティファはフ
エニックスを追つた。

「クソツ！クソツ！ちくしょお——つ！——！」

スザクは画面を真っ赤にして警告を放つモニターに、思いつきり
拳を叩きつけた。軍事製品だけあって、半端なく丈夫に作られてお

り拳が痛んだが、そんなのはどうでもよかつた。どちらにしろ、そのまま大気圏で燃え尽きれば拳の痛みなんか関係なくなる……

「もう、駄目なのか……」

思えば悔いの残りまくりの人生だ……こんななんじや、こんななんじや……！

「死ねるか――――！」

「じゃあ、生きる努力をしましょー！」

「へつ？」

スザクの渾身の叫びに誰かが答えた。それは……？

「ティ、ティファさん！？」

大気圏突入時に起こる激しい摩擦で目の前が赤くなつたモニターに、前回漂流中に助けてくれたGファルコンがいた。しかし、前の時と違いパイロットはパーラではなくティファさんのようだ。

「今から大気圏突入の為にドッキングします。相対速度を合わせるので、何もせず、操縦はこちらにまかせてください」

「えつ、あの……えつ？」

スザクは突然降つて湧いてきた生き残れる可能性に俺が戸惑つている間に、ティファはあつという間に機体をドッキング、その後滑らかな動きで機体の角度を固定した。

気が落ち着いてくると、体にかかる圧力が今さらのように激しく襲いかかる。

「降りる地点は……このまま行くとオーストラリアのエアーズロック付近になりそうですね……」

「エ、エアーズロック？」

（確かに地球のへそだつけ……？）

「ちょっとやつかいだけど、最悪ではないです……とりあえず、もう少ししだけ辛抱してください」

「は、はあ……」

スザクは言われるがままに重石のようにのしかかる圧力とノーマルスースー越しにも伝わってくる熱に耐えながら、だんだんはつきりしてきたモニターに映る地球へと目を吸い寄せられていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2063p/>

Gundam Generation Novel -Gジェネレーション ノベル-
2011年11月15日18時00分発行